



聖火が、鶴ヶ島を駆け抜けた。

東京2020オリンピック聖火リレー

👉初めて鶴ヶ島に聖火がやってきた!

7月6日から8日の3日間、埼玉県内で東京2020オリンピック聖火リレーが行われました。前回大会(1964年)の聖火リレーは残念ながら、鶴ヶ島を通過することはありませんでした。はるか遠いギリシャで採火されたオリンピック聖火は、7月8日9時53分、市内五味ヶ谷の広田橋交差点付近をスタート。7人のランナーのリレーにより川越坂戸毛呂山線(県道39号線)を北西に走り抜け、坂戸市へとつながれました。



広田橋交差点



杉下小学校付近

コンビニ付近

聖火リレーって、なに?

■聖火リレー

ギリシャ・オランダの太陽光で採火された炎をギリシャ国内と開催国内でリレーによって開会式までつなげるものです。

オリンピックのシンボルである聖火を掲げることにより、平和・団結・友愛といったオリンピックの理想を体現し、開催国全体にオリンピックを広め、来るオリンピックへの関心と期待を呼び起こす役割を持っています。

■前回大会の埼玉県の聖火リレー

昭和39年10月6日、聖火は、上里町で群馬県から引き継がれ、国道17号線、旧中山道を東京に向けて走り出しました。沿道には聖火をひと目見ようと多くの人がどが詰めかけました。

その後、聖火は、本庄市、深谷市、熊谷市、行田市、鴻巣市、北本市、桶川市、上尾市、72・7kmを1日で走り抜け、夕方、埼玉県庁に到着。翌7日、埼玉県庁を出発した聖火は蕨市を通過して戸田市に到着し、荒川にかかる戸田橋の中継所で、東京都に引き継がれました。

■東京2020オリンピックの聖火リレー

令和2年3月12日にギリシャ・オランダで採火された聖火は、3月20日に日本に到着。その後、宮城県、岩手県、福島県で展示されました。

令和3年3月25日に福島県の「ヴィレッジ」を出発し、全国の市区町村を回り、7月23日の開会式で聖火台に点火されました。





Photo by Tokyo 2020

Photo by Tokyo 2020



若葉台通り

ステーキ店付近

富士見中学校付近

ガソリンスタンド付近

圏央道付近



Photo by Tokyo 2020



Photo by Tokyo 2020



Photo by Tokyo 2020



聖火ランナーにInterview

東京2020オリンピック聖火リレーでは、47都道府県で選出された聖火ランナーたちが、それぞれの思いを胸に聖火をつなぎました。

東京2020オリンピック聖火リレーの主役である聖火ランナーとして、鶴ヶ島市内を走った市内在住ランナー3人の聖火リレーに込めた想いを紹介します。



次は選手としてオリンピックに参加したい

■走ってみたいと思った理由やきっかけ

オリンピックのチケット申込みは全て外れてしまい、何かオリンピックに関わりたと思っていて、聖火リレーが自分の住んでいる鶴ヶ島市を通ると知り、応募しました。

鶴ヶ島が好きでずっと住みたいまちなので、オリンピック聖火リレーに参加して鶴ヶ島をたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。高倍率の中、選ばれたと聞いて、すごくびっくりしました。

実は、祖母が前回の東京オリンピックのときに聖火リレーを走ったそうです。当時とはトーチの形や重さがどう違うのか、聞いてみたいです。

■聖火リレーへの意気込み

家族はみんな喜んで応援してくれていますが、特に九州にいるひいおばあちゃんに、テレビ画面を通してでもいいから、見てもらえたらうれしいです。

また、いとこが大勢いるのでいここに

も見てほしい。聖火リレーの前日7月7日は、両親の結婚記念日なので、二人をお祝いする気持ちも込めて、走りたいと思います。

■走り終えた感想

聖火ランナーの集合場所に集まったときは自分より大人ばかりで緊張しました。でも、話してみると皆さん楽しそうだったので、そのおかげで自分も楽しく過ごせました。

スタート地点では予想以上に応援の人がいたので、緊張して表情が固まってしまいました。でも、両親や祖父母、沿道の人たちの応援で楽しんで走ることができました。市長さんやつるゴンが応援してくれたこと、クラスの友達が横断幕を作ってくれたことは特にうれしかったです。

今回は聖火を運ぶ側としてオリンピックに参加しましたが、いつか選手としてオリンピックに参加したいです。

Interview



第1走者

はまざき しゅうと
濱崎 修人さん



Interview



自らは、さらに「熱く」、周囲には「温かな」存在に



第3走者

うしろぐち ひろし
後口 洋史さん

■走ってみたいと思った理由やきっかけ

市民ランナーとして30年以上走ることに向き合ってきました。「趣味で続けた市民ランナー」が、40歳でマスターズ陸上の埼玉県記録保持者となり、50歳で日本記録を樹立することができ、今ではたくさんの仲間が応援してくれています。私の走りを「市民ランナーのシンボル」として期待してくれている仲間に、私が走ることで「喜んでもらいたい思い」、これまで応援とともに支えてくれた家族への「感謝」、そして走り続けた自分自身への「ご褒美」の場として、聖火ランナーとして走りたいと思い応募しました。

■聖火リレーへの意気込み

生まれ育ち、日々のランニングでも走り続けた愛着ある大地の鶴ヶ島市を走れることを心から幸せに感じます。私は、走ることを続けてきたことで「走る楽しさ」だけでなく、「苦しさ」や「走り続ける難しさ」など、「走ることの深さ」を

日々感じてきました。聖火リレーを経験させていただくことで、新たな自分に出会えることを楽しみにしています。本番が近づくにつれて、「聖火」の重みも感じ、緊張感が増してきました。「感謝」の気持ちを込めて精一杯走ります。

■走り終えた感想

公道での聖火リレーが中止となる地域もあり、走ることに戸惑いもありましたが、地元鶴ヶ島の地を走ることが実現し、感無量の思いでした。沿道の拍手や声援が、生まれ育った鶴ヶ島が温かく迎えてくれたように感じ、感激で涙(私は「鶴ヶ島の雫」と呼んでいます(笑))があふれてきました。心から「郷土っていいな」と思った瞬間でした。

今回いただいた貴重な体験を「記念」「思い出」だけでなく、「熱き市民ランナー」として、今後の自分を「熱く」させ、人として周りを「温かく」できる存在になるための糧にしたいと思っています。



目標に向かって行動する一体感を味わいたい

Interview

■走ってみたいと思った理由やきっかけ

サザン地域支え合い協議会に登録し、病院受診の付き添いをさせていただくことがあります。白杖を使用している人の手を取りながら歩くと、歩道に高低差があったり、街路樹の根が地面を盛り上げていたり、常につまずかないか気になります。また、歩いているすぐ脇を、すごいスピードで自転車を通ることもあり、考えさせられることばかりです。どのようにしたら、お互い様で、少しでも住みやすくできるのか、小さい声ですが声を出して、発して行けたらと応募しました。

■聖火リレーへの意気込み

聖火リレーが一年延期になり、私だけでなく、周りの人たちからも輝きがなくなりました。コロナの人と人を引き離すという特徴が、原因なのだと思います。当たり前のように行っていたことができなくなり、改めて、人間は、人と人とがつながって、お互いのことを思い、助け

合い、補い合うものなのだと感じました。聖火リレーを通して、顔見知りの人はもちろん、初めて出会う人たちとも手を取り合って、一つの目標に向かって行動する。そんな一体感を味わいたいと強く思います。

■走り終えた感想

パレードのような演出の中、沿道の方々から、たくさんの応援をいただき、貴重な経験をさせていただきました。走る前には、「みんなで応援しているから大丈夫」、走り終えると「元気をもらったよ」と、多くの言葉をいただきました。ライブ配信を観ながら、目頭を熱くされた人もいて、その影響力に大変驚きました。温かい言葉をたくさんありがとうございました。皆さんのおかげで、私も、とても明るく、幸せな気持ちになれました。人と人との結びつきは、とても大切なのだと改めて感じました。聖火ランナーに選ばれて、本当に良かったです。



第5走者

しまむら せつこ
島村 節子さん